哲学歴史学科

哲学コース

哲学コースとは

「哲学」の語源は「知を愛する」ということです。人は古代から、森羅万象について知的好奇心を抱き、その本質やあり方を巡る思索を営んできました。こうした広い意味での「哲学」の営為は様々な知を探求する諸学問へと分化していきます。狭義の「哲学」には、世界や自然、神や人間、社会や自己、善や美とはそもそも何なのか、といった「永遠の問題」について原理的・根源的・論理的に探求するアプローチが、こんにちもなお息づいています。

哲学コースでは、古代から現代にいたる哲学の先人たちの思想や問題意識に学び、彼らと対話を重ねながら、自ら哲学的に思索する力を養うためのカリキュラムを用意しています。また教員や院生が主催するオープンな読書会、哲学カフェ、研究会なども開催しています。

高梨先生の研究

私の専門は「美学」です。「美学」は18世紀の半ばにバウムガルテンによって「感性的認識の学」として基礎づけられた、美や芸術について哲学的反省を行うものと言われていますが、むしろ感性や想像力、直観や感情など、前言語的、前概念的な人間の精神活動とそれにかかわる文化的営み一般が美学のフィールドであると言えます。美や芸術は、そうしたフィールドについて具体的に考えるための一つの手がかりに過ぎません。最近の私の関心は、（美や芸術に限定されない）感性的なもの一般は論理的・理性的なものとどのように関わるのか、また関わりうるのか、つまり感性的なものの合理性、という問題です。この問題について考えるために、カントやフッサールの超越論的哲学と対話を重ねています。

教授
高梨（たかなし） 友宏（ともひろ）先生

哲学コースを選んだ理由

壮大なことを考えることが好きだったので哲学コースに興味はありましたが、決め手となったのはコースガイダンスの時にどんなテーマでも哲学として扱うことが出来ると先輩に言っていただいたことです。その懐の広さに魅力を感じたので哲学コースを選びました。

哲学コースの魅力

哲学と聞くと少し難しいイメージがありますが、哲学コースの先生方はどんな些細な疑問にも丁寧に対応してくれますし、希望する生徒に対しては読書会を開催して一緒にとことん興味を追求してくれます。自分のペースで学問を探究できる点がとても魅力的です。

面白いと思った専門科目

【科目名】宗教学演習・講読

宗教学演習・講読はそれぞれの学生が関心をもつ宗教的な話題をテーマにみんなで議論するという授業です。自分で授業の内容を決められるので間違いなく興味関心を惹かれますし、自分とは違う新しい意見に触れることもでき、視野を広げるという点でもとても面白かったです。

3回生
手嶋（てじま） 春奈（はるな）さん

卒論テーマ例

- ミュージカル「エリザベート」が提示する生のあり方
- ハイデガーにおける気分と無について
- タイムトラベルにおける環状因果の可能性

哲学コースにとっての『とびら』とは？

「とびら」が、二つの領界を隔てる境界であり、またそれを越えて通過を可能にするものであるとすれば、哲学コースにとっての「とびら」とは、まさに哲学そのものでしょう。というのも、哲学は、「日常的な当たり前のものの見方」（ドクサや臆見と言われます）と、「先入見に捉われない哲学的世界観や学知」を隔てる〝境界〟を顕在化させ―そこに「とびら」があることに気づかせてくれ―、前者に批判を加えることを〝通じて〟―「とびら」を開けて―我々を後者に差し入れてくれるという一般的性格を持つと言えるからです。

とはいえ、哲学の「とびら」を実際に開けるのは、それを設けた哲学者自身ではなく、実は我々です。「とびら」を開ける「鍵」を見つけることが我々に課せられているのです。哲学の問いは、教えられるものではなく、自ら問いを生き、答えを見つけなければなりません。そこに哲学の魅力と困難があるのではないでしょうか。（文・高梨先生）

文学部の英名は“Faculty of Literature and Human Sciences”です。大学によって文学部の英名は異なり、この名前は本学文学部特有のものとなっています。